



年間第 23 主日 (マタイ 18:15-20)

十字架山は二人三人が集まって祈り合う尊い場所

今週は「兄弟の忠告」という具体的な問題を福音朗読で取り上げています。兄弟姉妹間で「心からの忠告」をすることはしばしば困難を伴いますが大切な務めです。朗読を通して学びを得たいと思います。

中田神父は五人兄弟姉妹の長男です。あとは弟三人と末の妹一人です。実家に帰ると次男と顔を合わせます。良好な関係ではありますが、母親からすればいつまでも親を頼っているの、いろんな忠告を私から言うように頼まれます。長男の果たす責任を次男が果たしてくれているので、お願いしたくても中田神父から言いにくいことも多いです。

これは一例ですが、兄弟姉妹間の「心からの忠告」は、困難を伴うことが多いのではないかと思います。忠告がすぐに結果を出すとも限りません。また忠告をいったん受け入れても反故にされたりして、他人でないだけに辛いなあと思ったりします。

福音朗読では「兄弟」という言葉は肉親よりも広い意味で使われています。「同じ国民・民族」あるいは「教会共同体」と考えて良いでしょう。その中で、忠告がどうしても必要になった時、粘り強く心を込めて忠告します。排除するための忠告ではありません。何とかして、神を信じる者同士繋がりを断ち切らないための忠告です。

長崎教区には、ローマ教皇庁に認定された巡礼所が二ヶ所あります。一つは西坂の「二十六聖人殉教地」もう一つは浦上小教区の辻町にある「十字架山」です。今日は十字架山について少し取り上げます。

この十字架山は、「旅」と言われた浦上村キリシタンの一斉流配から帰った信徒たちによって、信仰の自由が認められたことへの「感謝」と、それまでの罪の「償い」、そしていったん教えを棄てて立ち帰った人や為政者との「和解」のために、カルワリオの丘に見立てた辻町の丘の上に大きな石で三段の礎を築き、その上に十字架を立てたものです。

そして今年は、「旅」の終わり 150 周年の締めくくりとして本日 14 時から十字架山でミサがささげられます。かつて中田神父も、浦上の助任司祭の時にこの場所でミサをささげましたが、先祖の苦労を思うまでは至っていませんでした。再び機会を頂いたので、厳しい迫害が解けて 150 年経って、十字架山でミサをする意義について考えてみたいのです。

十字架山までは階段を上っていきます。ロザリオしながらミサをする現地まで上りますが、息が上がるきつさです。それでも、浦上の先祖たちも信仰の自由を得た感謝のため、上って行きました。

今週の福音に結びつけると、「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなげて一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれを行なってくれる」（18・19）とあるように、かつて十字架山に共に集まって、やっと取り戻した信仰の自由が決して失われないように、立ち帰った信徒たちともずっと信仰の喜びを分かち合えるように、喜んできつ階段を上っていった、その姿に倣うために、今日午後から十字架山

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

でのミサがささげられるわけです。

迫害の「旅」から信徒を連れ帰ってくださった神を信じる者の信仰は、あちこちで後の人々の信仰に繋がっていきます。五島もそうです。信仰を同じくする兄弟姉妹が、互いをいたわり合い、時には忠告し、二人三人が集まって祈り合う姿を、これからも大切にしていきたいと思います。

年間第 24 主日(マタイ 18:21-35)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。